



はとの子だより

No.12 令和7年3月19日(水)発行

学校教育目標 自律 のびのび きびきび わくわく

全ての可能性を引き出す ～令和6年度卒業証書授与式～

3月17日、卒業証書授与式の朝は、なごり雪が降り続いていました。

廊下に並んだ92人の卒業生が、ピンと張り詰めた空気の中、入場を待っています。

式場のドアが重い響きとともに開き、ゆったりとした足取りで卒業生が入場しました。

国歌・校歌の斉唱後、一人ひとりに卒業証書が授与されました。

自席を立ち、ステージ下まで歩き、壇上に上がり、点呼に応答し、礼をして証書を受け取り、また礼をして降壇する。途中、来賓席に一礼し、自席に戻る。ただそれだけの所作ですが、その一つ一つに卒業生がそれぞれの思いを込めていることが、ひしひしと感じられます。

10月下旬、例によって6年生に向けて「通過儀礼」の授業をしたことを思い出しました。卒業式などでの非日常的な動作から、その人の本当の人間性が表れるということ前置きしながら、卒業式での証書授与のシミュレーションと「所作」についての簡単な解説を行いました。「卒業式のとき、皆さんの所作によい人間性が表れることを期待しています」という話で締め括ったその授業を、全員が覚えていたかどうかは定かではありません。それでも、実際の卒業式では、一人ひとりの「所作」にその思いや意味を感じる場面がありました。登壇を待つ間、じっとステージ脇の校歌掲示を見つめている子、自分の前の友達



が点呼に応答し証書を受け取るまでを息をのんで見つめる子、校長先生からいただいた証書をまるで万歳するかのようにならんと掲げる子、降壇前の一瞬、保護者席にいるであろう自分の親御さんをじっと見つめている子…。まさに、一人ひとりの声聞こえてくるような「所作」でした。

もう一つ思い出したのは、「卒業のよろこび」を表現した呼び掛けと歌のときです。最後の歌「僕のこと」

では、一人で、数名で…と多くの子どもたちが次々に前に出て歌いました。数週間前、6年部の先生たちは、この試みをすべきかどうか悩んでいたのです。「以前、こういうことをすると一部の子もだけが目立つので教育的に平等ではない」という指摘を受けたことがある、というのがその理由でした。それでも、そうすることが子どもたちの思いを表現するのにふさわしいのではないかと、とも考え悩んでいたのだそうです。

果たして、結果はどうだったのでしょうか。「あの子がこんな場面で大勢の前に出て自分を表現できるようになったんだ」「あの子はこんなに高らかに歌えるんだ」「あの子は仲間と

一緒に自分を表現できることが心からの喜びになっている」等々、たくさんの思いもよらなかった子どもたちの姿を見ることができました。もちろん、そうしない子、できなかった子もいたのは事実です。しかし、



そんな子たちも、前に出て歌った子たちを否定するのではなく、逆に勇気をもってみんなの中で安心して自分を表現していたのではなかったでしょうか。そして、「いつかは自分も…」という決意を胸に秘めてこの日を終えたのではなかったでしょうか。前に出て思う存分に自分を表現できた子たちも含めて、たくさんの子どもたちが、新たな可能性を引き出されたように思えました。「全ての子どもたちをひいきする」とはこういうことであるし、このような取組が「全ての子どもたちの可能性をひらく機会を平等に担保する」ということでもあるという思いを強くした次第です。

たくさんの人の思いを乗せて、92名のはとの子たちが、また一つ広い世界に飛び立ちました。これまで子どもたちを支えてくださった保護者の皆様、本当にありがとうございました。今後、より一層の活躍を心より祈念しています。ご卒業、おめでとうございます。

佐々木雅子校長先生式辞

If Winter comes, can Spring be far behind? 「冬来りなば春遠からじ」イギリスの詩人シェリーの言葉に、私たちは冬の到来時、希望を見出し、風雪厳しき秋田の長い冬を越え、今、光り柔らぐ春の訪れを迎えようとしています。



平成から令和へと元号が新たになった年に入学し、コロナで苦しんだ約4年間を乗り越え、数々の150周年行事を見事に牽引した92名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。また、この6年間支えてこられた保護者の皆様、お子様のご卒業、心よりお祝い申し上げます。

さて、皆さんが生きていく時代、2つのものと共存する時代です。ひとつはスピードと正確さを誇る人工知能AI、もうひとつは古来あるがままの自然です。AIは短時間でものをつくり処理していきます。一方、自然は長い時間をかけて変化していくものです。私たちはどちらに近いのでしょうか。

450万部を超えるベストセラー『バカの壁』で知られる養老孟司は、『ものがわかるということ』の著書の中で、政治学者・思想家の丸山眞男を取り上げながら、人は自然の一部であるという感覚の大切さを説いています。丸山眞男は、日本神話で一番使われている言葉は、「なる」であると指摘しました。「実がなる」などの「なる」です。日本文化の根底には強く自然があり、「変化の持続」ということばを用いてその特徴を示しました。

AIと自然の大きな違いのひとつに、過程（プロセス）における時間の長さがあります。自然は、プロセスにおける時間を縮めることはしません。例えば、米作り。土作りから始まり、苗を植

え、稲穂が実り、米を収穫するまでのサイクルを急かすことはできません。自然には自然のリズムがあり、時間がかかります。言い換えれば、時間と手をかけなければ、豊かに育たないのです。人間の成長も然りだと思えます。

私たちが「生きる」という意味において、AI のように瞬時に事を成すよりも、時間をかけて事を成す意義はどこにあるのでしょうか？それは皆さん自身がこの小学校 6 年間で既に気付いていることでしょう。成し遂げた事はどれも簡単には始まらなかったし、容易には進まなかったと思えます。しかし、その時間をかけ手をかけたプロセスから得たものは、かけがえのないものとなったはずです。様々な体験を通し、様々な感情に揺さぶられ、苦しみ、悲しみ、辛さを経て、楽しさ、喜びに辿り着いたはずです。

私たちは「変化の持続」により成長すると言ってもいいでしょう。今日の自分が昨日の自分よりも進化していることが、成長です。では、自分を進化させ得るものは何か、それは自分の内から湧き出てくる情熱のようなものであると思えます。彫刻家で詩人、『道程』という詩で有名な高村光太郎が晩年過ごした岩手県花巻市にある高村山荘を、私は 28 年前に訪れました。「いくら廻されても針は天極を指す」という言葉が壁に掛けられていました。この研ぎ澄まされたほとばしる情熱に、雷に打たれたかのような衝撃を受け、しばし動くことができなかったことを今でも覚えています。

最後に、型にはまらず、熱い思いと思慮深さを持ち、ひるまずに伸びて行ってほしいという願いを込めて、高村光太郎の詩を朗読します。

激動するもの

そういう言葉で言えないものがあるのだ
そういう考え方に乗らないものがあるのだ

そういう色で出せないものがあるのだ
そういう見方で描けないものがあるのだ

そういう道とはまるで違った道があるのだ
そういう図形にまるで嵌らない（はまらない）図形があるのだ

そういうものがこの空間に充満するのだ
そういうものが微塵（みじん）の中にも激動するのだ

そういうものだけがいやでも己を動かすのだ
そういうものだけがこの水引草（みずひきぐさ）に紅い点々をうつのだ

「そういうもの」を内に秘め、92 名のはとの子の皆さん、その翼を広げ、空高く、力強く、羽ばたいてください。心からの祝福と声援を送ります。

令和 7 年 3 月 17 日

秋田大学教育文化学部附属小学校長 佐々木雅子